ツェワン・アラブタンの登場

若松　寛

【要約】清朝と北アジアの覇権を争い、ついに敗れて終った北アジア最後の遊牧王国ともいうべきズーンガル（準噶爾）王国の全盛期の基を開いたツェワン・アラブタン（策旺阿喇布坦）の治績については、未だ不明の点が多い。本稿では、かれが前王のガルダンに背いて、イリ地方のボロタラに拠り、以後ガルダンに対する一大敵国をなすに至った過程を述べるとともに、ガルダンに代ってズーンガル王に即位したツェワン・アラブタンが、一七〇一年に始まるヴォルガ・カルムックの内乱に介入し、一七〇四年にその部衆一万人を詐取して、これらを自己の所属の支配階級たるザイサン（宰桑）らに分給することによって、王権の確立に成功した事実を明らかにした。

史林　四八巻六号　一九六五年一一月

〔略語表〕

朔略＝親征平定朔漠方略

準略前＝欽定平定準噶爾方略前編

表伝＝欽定外藩蒙古回部王公表伝（国朝耆献類徴初編巻首所収）

厄魯特一、二＝皇朝藩部要略・巻之九、厄魯特要略一、巻之十、厄魯特要略二

ガルダン伝＝羽田明、ガルダン伝考証（東方学会創立十五周年記念東方学論集所収。東京。一九六二）

CBT＝Ratnabhadra, Rabjamba Cay-a bandida-yin tuquji saran-u gerel kemeku ene metu bolai, Ulanbator, 1959.

ПУК＝Веселовский, Н. И., Посольство к зюнгарскому Хунтайджи Цэван Рабтану калмыцкаго от артиллерии Ивана Унковского и путевой журнал его на 1722–1724, документы, изд. с предисл. и примеч., Зап. РГО по отд. этногр., т. X, вып. 2, СПб., 1887.

ИЗЮК＝Позднеев, А. М., К истории Зюнгарских Калмыков. (ПУК 所収 стр. 239–264)

ИДжХ＝Златкин, И. Я., История Джунгарского Ханства, Москва, 1964.

はじめに

ガルダン Galdan〈Dgaḥ ldan（噶爾丹）が清朝の英主康熙帝に敗れて、毒を仰いで自殺すると（康熙三六、一六九七）、ズーンガル Jūn γar（準噶爾）王国の政権は既にこれ以前に叔父ガルダンに背いて、ボロタラ Boro tala（博囉塔〔搭〕拉）を本拠として一大敵国をなしていたツェワン・アラブタン Tsewang arabtan〈Tshe dbaṅ rab brtan（策妄阿喇布坦、策旺喇卜灘）の手に渡った。ツェワン・アラブタンとその子ガルダン・ツェリン Galdan tsering〈Dgaḥ ldan tshe riṅ（噶爾丹策凌）の治世時は王国の最盛期であった。

以下、本稿ではツェワン・アラブタンの治績を、その幼時から、壮年期のズーンガリアにおける政権確立までの時期に限って、これを明かにするのが目的である。この過程はとりもなおさずガルダンの没落のそれと二重写しに映し出される性格のものであることはもちろんであるが、その間の康熙二十七年（一六八八）、ツェワン・アラブタンの二十四歳の時に起ったガルダンによるツェワン・アラブタン暗殺計画の失敗は、決定的に後者の前者からの背反独立のきっかけを与えることになった。この事件はその意味で特に詳しく扱うが、なおその他にガルダンの死後、必然的にズーンガル王の地位についたツェワン・アラブタンが、一七〇一年（康熙四〇）に始まるヴォルガ・カルムックの内乱を利用し、一七〇四年（康熙四三）にその部衆一万人を詐取して、これらを自己の所属の支配階級たるザイサン（宰桑）らに分給することによって王権の確立に成功した重要な事件のあったことを前以て指摘しておきたい。

一

一六七一年（康熙一〇）一月、ツェワン・アラブタンの父センゲ Senggе（僧格）は異母兄ツェツェン Čečen（車臣）、ヅォトバ・バートゥル Jodba bātur（卓特巴巴図爾）らと属産を争って殺された。この報を得たセンゲの同母弟ガルダンはダライ・ラマの許しを得て還俗、急ぎ帰国して、翌一六七二年（康熙一一）、オチルトゥ・ツェツェン・カーン Očirtu čečen qān（鄂齊爾図車臣汗）の援けを得てツェツェンを擒殺し、ヅォトバ・バートゥルを青海に走らせ、兄の仇を報いてコンタイジと称し、兄の妻であったオチル

トゥ・ツェツェン・カーンの孫女アヌ Anu（阿奴、阿努）を娶った（ガルダン伝）。父を失った時のツェワン・アラブタンの境遇とその後の成長を考えてみよう。

ツェワン・アラブタンの生年については二説ある。一つはミューラー Müller, G. F. 及びパルラス Pallas, P. S. の伝える一六六五年説である。しかしその根拠はいずれも示されていないが、[1] ロシア・カルムック史料に拠ったことは疑いない。もう一つは準略前・巻四〇、乾隆元年正月丙午の条の噶爾丹策零の表文の中に述べられているツェワン・アラブタンの略伝（以下この表文の記事を単に、表文と略称）にみえる左の記載である。

歳在己巳（康熙二八、一六八九）。我父年四十七。

これによれば、ツェワン・アラブタンは一六四三年（崇徳八）の生れということになる。[2] しかしこの年代はツェワンの叔父のガルダンの生年、一六四四―四五年（順治元）（ガルダン伝）より古くなってしまい、成立し難い。またツェワンの父センゲの生年は一六三〇年頃と伝えられており、[3] それよりすれば、ツェワンはセンゲの十四歳頃の子となってしまう。なおまたツェワンの死は一七二七年（雍正五）にあるので、かれは八十五歳の非常な高齢まで生きたことになる。しかし、一七二二年十一月―二三年九月の間、ツェワン・アラブタンの本営に滞在したロシア使節、砲兵大尉イワン・ウンコフスキー Иван Унковский の伝えるところによれば、

コンタイシャ Контайша（＝ツェワン・アラブタン）は六十歳ぐらいである（ПУК, стр. 196）。

とある。そこでミューラーらの説を採れば、この頃ほぼそれに当る年齢になる。さらにまたウンコフスキーによれば、センゲ Сенга が殺されたとき、

センゲの後に年の幼い三人の息子達、ツェワン・アラブタン Цаган-Арапдан〔今のコンタイシャ〕（策旺阿喇布坦）、ソノム・アラブタン Сором-Арапдан（〈Sonom arabtan〈Bsod nams rab brtan 索諾木阿喇布坦）、ダンジン・オムブ Данжин-Омбу（〈Danjin ombu〈Bstan ḥdsin dbon po 丹津俄木布）が遺された（ПУК, стр. 182）。

とある。ミューラーらによれば、一六七一年のこの時、ツェワンは七歳の幼年になるが、表文に従えば、二十九歳ということになり、ウンコフスキーと明かに矛盾する。しか

しこの時ツェワンが幼かったことは、同じ表文自体に、

我父幼時。与博碩克図汗（＝ガルダン）。同居共事。

とあることから明かである。なおこの記事から、ツェワンは父を失った時、幼かったが故に、叔父のガルダンと住居を共にしつつ、そのもとで育っていったこと、そして離反する以前は叔父に協力していたことを窺い知ることができる。いずれにしても、表文の伝える年齢にはそのままでは従えない。

次にツェワン・アラブタンの子のガルダン・ツェリンの生年の場合を考えてみよう。ミューラーによれば、かれは一六九五年頃、第一夫人から生れたという。④またウンコフスキーの「コンタイシャ家リスト」によれば、ツェワンの第一夫人グュング・アラブタン Гюнгу Арабтан からの子が長子のガルダン・ツェリン Голдан Церин であることが示されている（ПУЕ, стр. 197）。とすれば、ガルダン・ツェリンは、表文に従えば、ツェワンの五十三歳頃の子ということになり、それまでツェワンに子がなかったとはとうてい考えられない。一方ミューラーらに従えば、ガルダン・ツェリンはツェワンの三十一歳頃の子となり、この方がより合理的である。

また次にツェワンが叔父から離反する以前に叔父に婚約者を奪われた事件の場合を問題にしてみよう。朔略・巻二七、康熙三十五年七月戊午の厄魯特の降人、丹巴哈什哈らの供称によれば、かつてツェワンとガルダンとの間に次のような事件のあったことが伝えられている。

昔。窩齊爾図車陳汗之子噶爾旦木巴之女阿海。原与策旺喇卜灘議婚。康熙十八年。娶阿海至。不配策旺喇卜灘。噶爾丹自取之。

ツェワンが婚約者のオチルトゥ・ツェツェン・カーン（窩齊爾図車陳汗）の孫女アカイ Aqai（阿海）⑤を娶らんとして、ガルダンに奪われた康熙十八年（一六七九）は、表文に従えば、ツェワンの三十七歳という若くない年齢になってしまう。一方ミューラーらに従えば、この時十五歳ということになり、この方が妥当である。

以上の点から、わたしは表文の説を退けて、ミューラーらの一六六五年説に従いたいとおもう。⑥

さてツェワンは独立する以前に、ガルダンと住居を共にして、かれに協力したことは既述の如くであるが、これについての具体的な記述を清朝側の史料に検出することはで

きない。一方ロシア史料によれば、センゲの殺された同年、一六七一年の十月に、中国旅行からトボリスクに帰着したロシア使節セイトクル・アブリン Сейтекул Аблин の護衛を兼ねて、ロシアに遣使したカルムック族の酋長としてその名のみえるタイシャ、ガガン Гаган とアラブタリ Арабтарь を、ズラトキン氏はガルダンとツェワン・アラブタンとみている。[7] もしそうだとすれば、この時ツェワンはわずか七歳の幼少であったはずであるから、かれ自らの意志でロシアに遣使したとはとうてい考えられない。またこの時ガルダンは未だ次のズーンガル汗として認められていなかったようなので、従ってガルダンはロシアへの遣使に当って、前のズーンガル汗の子の名を使用せざるをえなかったと考えざるをえない。ガルダンが新ズーンガル汗と認められて、コンタイシャ Контайша〈mo. Qong tayiji（琿台吉）と称した一六七二年以後、[8] 叔父から独立する以前のツェワンの姿は当時のロシア文書に全くみあたらないようである。一方ウンコフスキーは、ツェワンが弟のソノム・アラブタンをガルダンに殺された事件（康熙二七、一六八八。後述）を記すに当って、

上記のツェワン・アラブタン〔今のコンタイシャ〕とその弟のソノム・アラブタン及びダンジン・オムブは当時既に成人しており、かつ職務において、叔父ボショクトゥ・カーン Бошугу-хан（〈Bošoγtu qān）の時に長たる人物であることができた。とくにツェワン・アラブタンとソノム・アラブタンは職務において幸運にめぐまれていた（ПУК, стр. 184）。

といっている。このことは先にも記した如く、ツェワンが当初ガルダンに協力していたことを裏書きするものである。しかし、やがてツェワンとソノム・アラブタンがガルダンの地位を脅かすものとして、かれに危害を加えられなければならなかったこの事件の真相は後に明かにするとして、その時のツェワンが表文より算定して、四十六歳の遅きであったとはまた考え難いのである。

次にクーラン Courant. M. によると、一六六五年に生れたツェワン・アラブタンは父の政権を継ぐにはあまりに若かったので、一六七七年のオチルトゥ・カーン攻撃には二弟と共にガルダンの軍に加ったといい、それ故にかれの生年は少し遅いようにみえるともいっている。[9] クーランの説は何に拠ったものか今は分らない。一六七七年は、ツェ

ワンの十三歳の時に当る。もしクーランのいう通りだとすれば、ツェワンはオチルトゥ攻撃の時、ガルダンの保護下にあったために、必然的にこれに名を連らねていたということではなかろうか。

以上の如く、ツェワンは幼い時からガルダンの保護下にあって、かれに協力していたことは疑いないとしても、成長するに及んで前のズーンガル汗の子としての自分の立場について自覚するところがあったであろう。また既述の如く、康熙十八年にかれは婚約者を叔父に奪われた事件があった。しかし、それだからといって当時十五歳のかれに公然と叔父と対立するほどの力はなかったであろうが、この事件が後に叔父からの離反の一つの原因となるほど叔父への激しい憤りを抱きつつ、青年期を過していったとおもわれる。次にツェワンのガルダンからの離反という重要な事件を明かにしよう。

二

ツェワン・アラブタンのガルダンからの離反についてもっとも要領よくまとめているとおもわれる厄魯特一、康熙二十九年の条の記事をまず掲げよう。

初僧格之死。有子三。長曰策妄阿喇布坦。次曰索諾木阿喇布坦。次曰丹津鄂木布。及噶爾丹為厄魯特長。不善撫之。反虐殺索諾木阿喇布坦。且奪策妄阿喇布坦議聘之妻阿海。阿海者。阿努女弟也。策妄阿喇布坦由是怨噶爾丹。与僧格旧臣七人。率部衆。遠徙額琳哈畢爾噶。又徙博囉搭拉。

この記事は、ツェワンが弟のソノム・アラブタンをガルダンに虐殺され、而してかれから離反した事件と、婚約者、阿海を奪われた事件との正確な紀年を述べていない。しかし後者の事件は康熙十八年のものであったことは既に明かにした。前者の事件の紀年については、既述の丹巴哈什哈らの供称（朔略・巻二七、康熙三十五年七月戊午）に、

（康熙）二十七年。居和卜屯時。策旺喇卜灘之弟索諾木喇卜灘。在噶爾丹所。没後。策旺喇卜灘率兵五千而逃。噶爾丹。率兵二千追之。及之于布克他厄冷哈必爾罕之地。問策旺喇卜灘曰。爾何所恨而来。策旺喇卜灘曰。我原議婚之妻阿海。爾取之。我親弟索諾木喇卜灘。爾殺之。又恐殺我。故畏懼而来。

とあり、それが康熙二十七年（一六八八）のことであったことがわかる。この記事によれば、ツェワンが叔父に背いた事情は明かである。つまり、かつての婚約者、阿海の事件

に加えて、いまはまた弟を殺され、あまつさえ自己の生命を危くされるのを感じて、父センゲの旧臣七人を筆頭に、部衆五千を率いて、叔父のもとから逃れたのであった。一方また先のガルダン・ツェリンの表文によれば、

我父幼時。与博碩克図汗。同居共事。後彼漸強盛。既害其弟。又欲潛図我父。歳在己巳。我父年四十七。与彼交悪。収其土地人民之半。建牙於額林哈畢爾噶之地。

とあり、これによればツェワンが叔父から逃れて、額林（琳）哈畢爾噶～布克他厄冷哈必爾罕に到ったのは、ソノム殺害の翌年の己巳の年、即ち康熙二十八年（一六八九）のことになる。この間の経過を伝えるものとして、なお次のザヤ・パンディタ伝の記事がある。

龍の年（戊辰、一六八八）は過ぎ、蛇の年（己巳、一六八九）の春、ツェワン・ラブタン Čewangrabtan は一切知者ダライ・ラマの祝福によって、留ることなく七人と共に背いて行くとき、所属の秀れたる一切の民も背いて行き、カラ・アザラガ Qara ajarar-a の丘を越えて行くとき、〔ボショクトウ・〕カーンは全軍を率いて、後から追った（CBT, p. 54）。

これによれば、ツェワンがソノム殺害事件の翌一六八九年春に逃避行を行ったことは明かである。右の龍の年にガルダンはカルカ遠征に赴き、コブド Qobdo（和卜多、科布多、和卜屯）の本営に帰還したのが、同年冬の初めの月〔十月〕の十七日のことであったというから（CBT, ibid）、従ってソノム殺害事件はその後、おそらくその年の末にあったこととおもわれる。

ツェワンが逃れた額林（琳）哈畢爾噶～布克他厄冷哈必爾罕の地は、ツェワン・アラブタン及びその子ガルダン・ツェリン二代に歴事し、前後十七年間イリに滞在したスウェーデンの砲兵軍曹レーナット Renat, J. G. が、一七三三年に釈放されて故国に帰った際持参したズーンガル王国製の中央アジア地図、いわゆるレーナット地図二葉 Renat Maps の第一図（Renat Map 1）にみえる、イリ河の支流ハシュ Xaш 河（Qaši γol 哈什郭勒[10]）の水源附近のエレーン・ハビルガ Ерен Хабирга〈Erēn qabirγa[11]〉であることは疑いない。なおザヤ・パンディタ伝にみえるカラ・アザラガは、レーナット地図第二（Renat Map 2）にみえるムン・カラ・アジルガ Мун Хара аржирга であろう。同図によれば、この地はコブド・ウリヤスタイ路を横切るザバカン河

Забаханг гол〈Jabaqan γol（扎布堪河）の西南に当っている。[13]なおまたザヤ伝にみえるツェワンと行を共にした七人が、厄魯特一にみえる「僧格旧臣七人」であることは自明であろう。ツェワンが逃避行に当って、父センゲの旧臣の強い支持を受けたことは、欽定皇輿西域図志・巻首一天章一、準噶爾全部紀略に、

先是。噶爾丹博碩克図。既殺兄僧格之次子索諾木阿拉布坦。僧格旧臣七人。与策妄阿拉布坦。同遠逃。準語所謂多倫努庫爾（=dolōn nōkōr）者是。多倫者。漢語為七。努庫爾者。漢語謂友。蓋其患難相共。所謂世臣。並赦其子孫七死云。

とあることから推察できよう。そしてこの七人と共に、五千の部衆がツェワンに従ったというから、ツェワンの逃避行がたんに自己の生命を惜しんでの行動だけではなかったことは想像に難くないであろう。

ここでツェワンと行を共にした人物群についてなお知る所を記すと、ツェワンと同じ準噶爾族でガルダンの弟、温春台吉 Ončun tayiji の次子の達爾扎扎木揚 Darja jamyang〈Dar rgyas hjam dbyaṅs 等がツェワンの逃避行に従っている（表伝・巻七八伝六二、厄魯特扎薩克輔国公丹済拉列伝）。なおその他に、デルベート Dörbed（杜爾伯特）の諸台吉が多く参加している。表伝・巻九五伝七九、杜爾伯特部総伝に、

準噶爾台吉噶勒丹。虐諸昆弟子姓。（姪？）兄子策妄阿喇布坦。棄徙博囉塔拉。杜爾伯特諸台吉従往。

とある如くである。博囉塔拉 Boro tala は、ツェワン一行の逃避先である。デルベートがガルダンの治世時にはほとんど見るに足るべき活動を示していないのに反し、ツェワンの政権確立後、ドゥルベン・オイラットの一ウルスを構成するに至った遠因はこの功績に求められるかもしれない。いずれにしても、結論的にいって、ツェワンの逃避行は、ガルダンを快しとしない一派が、センゲの遺子を奉じて、新勢力を形成するための行動であったと考えられるのである。

三

さてここで改めてこの事件の真相を明かにしてみよう。この事件について、またウンコフスキーはカルムック滞在中に聴取した次のような伝聞を記している。

ボショクトゥ・カーンは長老ラマ〔僧〕の中傷により、甥のツ

ェワン・アラブタン〔今のコンタイシャ〕とその弟のソノム・アラブタンを秘かに殺す意図を抱いた。それはかれらが権力を持つようになり、相続権により по наследству、かれボショクトゥ・カーンから所領を奪い返すことを恐れたからである。そこでその意図のもとに、ソノム・アラブタンは夜秘かに絞殺されたが、ツェワン・アラブタンはその時不在だった。弟の死後数日経って帰って来ると、叔父のボショクトゥ・カーンはツェワン・アラブタンに、「汝の弟は急死した」と語った。而してその晩ツェワン・アラブタンを殺そうとした。しかしアランジャバ Аранжаба という名の某ラマはツェワン・アラブタンに、「汝の弟は秘かに殺された。もし汝は逃げなければ、殺されるであろう」と告げた。そのためにツェワン・アラブタンは七人の忠実なカルムックとこのラマ、アランジャバを伴ってボロタラ Боротала (〈Boro tala) 河へ去った。……ボショクトウ・カーンからかれらに向け追撃隊が派遣されたが、それをカルムックはボロタラ河から追い払った。そのようにしてツェワン・アラブタンはそこのボロタラ河に住みつき、人民と家畜を殖やしはじめた (ПУК, стр. 184-185)。

まず事件の原因であるが、ウンコフスキーはこれを相続権による争いと伝えている。とすれば、この時のツェワンを二十四歳とすることによってより合理的に、ウンコフスキーのいう、ツェワンが実力を持つようになり、相続権を主張するにふさわしい年齢とみることができよう。従ってツェワンは、父を殺された時、幼かったが故に、当然つぐべきズーンガルの王権を、事態を収拾するために還俗してチベットより帰国した叔父ガルダンの手に渡さざるを得なかったが、長ずるに及んで、その回復を意図していたと考えられるのである。一方、この事件に至るズーンガル王国内の客観情勢としてガルダンが、その統治態度において、周知の如く、第五代ダライ・ラマ、というよりも、その執権職で実力者のディバ Diba〈Sde pa (第巳)・サンギェ Sans rgyas〔rgya mtsho〕(桑結) の支持を受けて、ラマ教＝ズーンガル世界帝国の建設を急ぐあまり、ズーンガルの部衆の利益と相反する行動をとったことである。既に引用した表伝・巻九五伝七九、杜爾伯特部総伝の

準噶爾台吉噶勒丹。虐諸昆弟子姓。[姪?]

の一句は、右の事情から主として説明さるべきであり、なおその他に直接の史料をあげれば、ガルダンは死の前年、康熙三十五年に克魯倫 Kerülen 流域に軍を進めて大敗し

たとき、自ら語って（朔略・巻二五、康熙三十五年五月癸酉）、

噶爾丹云。我初不欲来克魯倫地方。為達賴喇嘛煽惑而来。由今観之。是達賴喇嘛陷我。我又陥爾衆人矣。

とあり、この言葉は右の事情をよく裏書きするものであろう。こうしたガルダンの行動に反感を持つセンゲの旧臣たちがソノム殺害事件以前にツェワンの周囲に集っていたであろう。というのは、ウンコフスキーから知られる如く、ツェワンは弟の死後数日経って、不在から帰って来たその晩ガルダンの魔手を逃れて直ちに去ったはずでありながら、この時のツェワンの逃避行の一行が部衆五千に及ぶ大群であった所からすれば、このような火急の際にこれだけの人数が集まったことからして、ツェワンに心を寄せる相当数の同志がこれ以前に存在していたことが前提としてなければなるまい。こうしたことの危険を感じたガルダンは禍の元兇たるツェワンを一気に屠らんとして失敗し、わずかにその弟ソノムを殺すに過ぎなかったのではあるが、その結果は、ここに新興勢力のガルダンと旧勢力を代表するツェワンの二派が決定的に分裂することになってしまったのだと考えられる。

さてソノム事件についてのウンコフスキーの伝聞にもう少し検討を加えておこう。事件当時ガルダンがコブドに本営を置いていたことは既述の如くであるが、ツェワン兄弟もまたコブドの叔父のもとにいたことは、これまでの記述を通じてもはや明かであろう。ソノムは叔父のもとで殺されたが、ウンコフスキーによれば、それは絞殺であったという。しかしこの点に関しては異説がある。朔略・巻九、康熙三十年二月戊午の条のツェワン・アラブタン自らがガルダンとの不和の事情を清朝に報告した中に、

我国内自交悪。因奈冲鄂木卜。擅権毒殺我弟。与我亦不睦。我国人民交悪離散。

とある。奈冲鄂木卜は、Gnas chuń dbon po と還元できよう。これが或いはウンコフスキーのいう長老ラマかもしれない。またツェワンに急を告げたアランジャバ Apaнzaба なる某ラマについては他に何も知る所はないが、その名は Rab hbyams pa と還元できよう。なおウンコフスキーのいう、ツェワンと行を共にした七人の忠実なカルムックとは、既述の「僧格旧臣七人」であることは自明であろう。

ところでツェワンには末弟にダンジン・オムブがいた訳

であるが、かれは事件にはどのような関係があったであろうか。これについては、朔略・巻四八、康熙三十七年四月癸亥の条に、ツェワン・アラブタンがガルダンの死後来帰した末弟ダンジン・オムブを拘禁した事情を陳奏して、

丹津俄木布聽讒。与噶爾丹同殺其兄索諾木阿拉布坦。後臣与噶爾丹分散。各自游行。丹津俄木布。又偕阿奴喀屯。往就噶爾丹。今窮迫而後来帰。始知以臣為兄。

とある。ツェワンはダンジンの行動を讒言に動かされたためだと弁明してやってはいるが、ともかくソノム毒殺事件にダンジンはガルダン側に荷担していたのである。[14] それ故にこそ事件後、ダンジンは、父の死後ガルダンに嫁した母の阿奴喀屯 Anu qatun と共にガルダン側に留らざるをえなかったのにちがいない。なお表伝・巻七八伝六二、厄魯特扎薩克輔国公丹済拉列伝の康熙二十三年の条によれば、

時噶勒丹自号博碩克図汗。厄魯特族皆隷之。然性残虐。諸台吉宰桑。惟善丹済拉与阿喇布坦・丹津鄂木布・格類固英。信丹済拉尤篤。有事必与謀。

とあり、ダンジンが事件以前からガルダンの忠実な支持者だったことが記されている。[15] ガルダンの信頼の最も厚かった丹済拉 Danjila〈Bstan ḥdsin lha は、ツェワンの逃避行に加った達爾扎扎木揚の兄で、ガルダンの死に至るまで、かれに忠誠を尽した人物である。[16]

四

さてウンコフスキーによれば、叔父の魔手を逃れたツェワンはボロタラ河へ去ったという。しかし既に明かにしたように、ツェワンが最初に逃れた地はエレーン・ハビルガであったはずである。これはどういうことか。

先の丹巴哈什哈らの供称によれば、ガルダンはツェワンの五千の兵に対して、二千の劣勢でこれをエレーン・ハビルガに追い、而してツェワンに逃亡の理由を尋ねたことになっている。ということは、ガルダンが未だ計画の失敗を十分に知らなかったことを示すものであろう。ツェワンに理由を尋ねたガルダンが、それからどうしたかということを丹巴哈什哈らは語っていない。一方ザヤ・パンディタ伝は、先の記事に続けて、

久しからずして、ウラーン・ウスン Ulayan usun に追って来たとき、迎えて力戦するに、ウルジンジブ Urjinjib をはじめ、

カーンの敗れるのを知って、金杆の先端を樹て、招撫するがまに招撫した。カーンは帰って行った（CBT, p. 54）。

といい、まもなくガルダンがウラーン・ウスンで敗れたことを明かにしている。また表文には、己巳の年（康熙二八、一六八九）のこととして、

彼発兵来攻我。大敗於烏蘭烏蘇。

とあり、ザヤ伝の記事を裏づけている。ウラーン・ウスン Ulayan usun、烏蘭烏蘇が、欽定西域同文志・巻一、天山北路地名、烏魯木斉東路にみえる烏蘭烏蘇 Ulayan〉Ulān usu に、またバルクル Bar kūl（巴爾庫勒、巴里坤）の西、アクタス Aytas（阿克塔斯）を距ること七十里の烏蘭烏蘇[17]に当ることは疑いの余地がない。ここに到れば土魯番ももはや指呼の内にある。

おもうに、ガルダンはエレーン・ハビルガでツェワンに追いついたが、事の次第を知って、ひとまずその場を去り、軍を直す間に、ツェワンはさらにこの地に逃れ、而して後ガルダンを破ったのであろう。この年八月ガルダンに使いした尚書阿爾尼 Arani が、

噶爾丹敗于策旺拉卜灘。下人散亡略尽。又極饑窘。至以人肉為食。[18]

と報告しているのは、この大敗のことを指したものにちがいない。かれの報告はいささか誇張に過ぎようが、ガルダンは当時この敗北に加えて、厳しい天災の痛手に苦しんでいた訳である。

かくしてガルダンをひとまず撃退したツェワンがボロタラ河に移ったことは、先の厄魯特一に、「又徙博囉搭拉」とある通りである。ウンコフスキーに、ツェワンが叔父のもとからただちにボロタラ河に移ったとしてあるのは、以上の経過を省いたものにちがいない（なお表伝にもこれと同様の記事がある）[19]。こうした事実、及びウラーン・ウス（ン）が地形上、大兵を駐屯させるにふさわしくない如くである点[20]などから判断して、そのボロタラへ移った時期は、おそらく同年、即ち康熙二十八年（一六八九）内のことであったであろう。

ところでボロタラはガルダンにとって、かれの重要な冬営地であった。ザヤ・パンディタ伝によって、一六八〇年以降のガルダンの冬営地を検出してみると、ボロタラ Borotala がかれの冬営地として記されている年は、

猿の年（庚申、康熙一九、一六八〇）（CBT, p. 49）。鳥の年（辛酉、

康熙二〇、一六八一）(Ibid., p. 50)。虎の年（丙寅、康熙二五、一六八六）(Ibid)。

の如くであり、なおその他に、犬の年（壬戌、康熙二一、一六八二）はイリ Ili に (Ibid)、――一六八三―八五年の間は不明――、また兎の年（丁卯、康熙二六、一六八七）はイルティシュ Ertis に過している (Ibid)。ツェワンがボロタラに根拠地を求めた一つの理由が、その豊かな水草にあったことは疑いない。しかしそれだけにガルダンはこの地方の確保に努めていたはずである。ウンコフスキーによれば、ツェワンがボロタラを目指した理由として、ガルダンは自らカルカ侵略（一六八八）に赴いた際、ボロタラに一人のザイサン zaičan〈Jayisang（宰桑）に二千の兵をつけて留めておいた。ツェワンがボロタラに去ったとき、かれの一行はこの地に遊牧していたこのザイサンに迎え入れられたということである (IIVK, стр. 184)。この記事を他に確認することはできないが、ツェワンにこうした支持勢力があったことを認めておきたい。

以上の考察よりすれば、ポツドニェフ、[21] 及びこれに従ったバルトリド Бартольд, В. В.、[22] ズラトキン[23] の諸碩学が、ツェワンはソノムの死後、一六七八年にトゥルファンに去ったとするのは誤りとしなければならない。また矢野仁一博士が、弟を殺されたツェワンは一六七九年までにはボロタラに移っているとしておられるのも、[24] 同様に誤りである。その点では、ツェワンの逃避先をバルハッシ Balkhach 湖とする誤りはあるとしても、ソノムの殺害を一六八八年に、ツェワンが叔父を破ったのを一六八九年とするクーラン[25] に従うべきものがあるとしなければならない。

さてボロタラに拠って反抗の火の手をあげたツェワン・アラブタンは積極的反撃の機会を狙っていた。ガルダンは康熙二十九年（一六九〇）、再びカルカを侵し、ウジュムチン Üjümučin（烏珠穆沁）まで長駆東進し、鋒を転じて、赤峰近傍のウラーン・ブドゥン Ulān budung（烏蘭布通）まで南下するに及んで、清の裕親王の軍に邀撃されて大敗した。ツェワンはこの好機を利用し、ガルダン不在のコブドに侵入して大成果をあげた。既述の丹巴哈什哈らの供称にはまた、

噶爾丹至烏蘭布通後。策旺喇卜灘。尽収噶爾丹之妻子人民而去。

とあり、なおまた表伝・巻七七伝六一、厄魯特扎薩克多羅

郡王阿喇布坦列伝の康熙二十九年の条に、

策妄阿喇布坦。偵噶勒丹侵喀爾喀。潛兵至科布多。掠噶勒丹妻阿努及牲畜去。

とあり、ツェワンはガルダンの妻の阿努をはじめ、人民、牲畜の多くを奪って去った。この年十月ガルダンはようやく軍を返し、コブドに向った（厄魯特一）。一方ツェワンはちょうどその頃鋒先をガルダン支配下の東トルキスタンに向け、とくに近隣のトゥルファンの確保に成功した。ザヤ・パンディタ伝の馬の年（庚午、一六九〇）の条に、ガルダンのウラーン・ブドゥンの大敗以後を叙して次のようにある。

〔ボショクトゥ・〕カーンは〔カルカより〕戻って来て、コブドに居た。その頃ツェワン・アラブタンはトゥルマン Turman、コイット Qoyid 等ことごとくを権力下に収めた（CBT, p. 60）。

トゥルマンがトゥルファン（土魯番〜土魯満）であることは自明であるが、コイットはいささか難解に属する。しかし朔略・巻四八、康熙三十七年九月癸未の条のツェワン・アラブタンがオチルトゥ・カーンの孫のガルダン・ドルジ Galdan dorji〈Dgaḥ ldan rdo rje（噶爾旦多爾済）について、清朝に報告した中に、

彼（噶爾旦多爾済）又従厄冷哈哈必爾漢逃去。往回子所居庫察城。被揮特人等所殺。

とある揮特人がそれであろうとおもわれる。この揮特人がドゥルベン・オイラト Dörben oyirad（四衛拉特）の一族の輝特 Qoyid の民を指すものかどうかは今は明かでないが、ともかくツェワンの占領したその地はクチャ Kucha（庫察）を指すものと考えたい。従ってかれはガルダンがカルカより軍を返してコブドに戻って来た頃、トゥルファン、クチャ等の東トルキスタンの一部の都市を掌中に収めていたということになる。[26]

次に、またザヤ・パンディタ伝によれば、ツェワンのトゥルファン攻略に続けて、次のように記されている。

〔ツェワン・アラブタンは〕馬の年（庚午、康熙二九、一六九〇）に行き、羊の年（辛未、康熙三〇、一六九一）の春の中の月〔二月〕の初一日に〔カーンの〕牧地を奪い、ダンツァンワンボ Dangčangwangbo、プンツクタシ Pungčuytasi 等はカーンの牧地を尽く移さしめた（CBT, p. 60）。

右によれば、ツェワンは一六九〇年から九一年にかけてコブドに帰っていたガルダンを攻撃し、二月初一日にその

牧地を奪ったことになる。一方また表文によると、

辛未。克取其撒克里。烏蘭古木之地。

とあり、辛未、即ち一六九一年にツェワンは撒克里、烏蘭古木の地を占領したことがみえている。この両記事が同一の事件を指したことは疑いない。従ってツェワンの一六九〇―九一年二月初一日にいたるコブド攻撃の成果は撒克里、烏蘭古木の獲得にあったと考えられる。撒克里は、レーナット地図第二にみえるサクリ Сагли〈Saγli 河の地方であろう。サクリ河は、同図によれば、ウプサ・ノール Ubsa nor（烏布薩泊）に西北より注ぐ河であり、[29] 現在この河に沿ってサギリ Сагили、サクルィ Сагилы などの地名が残っている。[30] 烏蘭古木は後に清朝の屯田の地として著名であり、改めて説明の必要はないが、同図にサクリと並んでみえるウラーン・グム Улан гум〈ulān gōm である。[31]

ツェワンがこの地方を占領したことは、イルティシュ上流域も既にかれの掌中に帰していたことを示している。一六九一年春トボリスクを出発して、同年末ガルダンを訪れたロシア使節マトヴェイ・ユーディン Матвей Юдин の報告によれば、かれは往路、ガルダンの本営から来たラマに出会い、ラマは、ツェワン・アラブタンが四万の軍を率いてイルティシュの溪谷に遊牧していること、ガルダンは東方遠征に同じく四万人を参加させ、帰途約半数が疫病で死んだと告げた、ということである（ИДжаХ, стр. 299）。これによれば、この頃ツェワンがイルティシュ上流域を確保して、ここにとどまっていたことは明かである。なおこの報告で、ツェワンの兵力を四万といっているのは誇張に過ぎようが、かれが急速に自己の勢力を拡大していたことは認められよう。

以上の如くしてツェワン・アラブタンは一六九一年までに、自己の本拠ボロタラを中心に、北から北東にかけてのイルティシュ上流域からウプサ・ノールに至る全地域、換言すれば、ガルダンの本拠コブドの背後を包囲する形のズーンガリアのほとんど全域と、東南のトゥルファンから南のクチャに至る東トルキスタンの一部とを自己の掌中に収めたのである。

五

さてガルダンがツェワン・アラブタンを敵にまわした結

果、次第に窮地に陥っていったことは、以上の如くである。一方この間の清朝側の動きについてみると、朔略・巻六、康熙二十九年四月甲子の勅訓策旺拉卜灘及阿奴与噶爾丹交悪情由の条に、

今聞爾等与噶爾丹不和。致啓争端。爾厄魯特向修職貢。恭順惟謹。今乃内自交悪。必有其因。朕甚憐之。遠聞之言。虚実難拠。特遣侍読学士達虎。賚御用各緞二十疋。賜策旺拉卜灘・阿奴。其以爾等交悪之由。明告使臣毋隠。

とあり、ようやく事情を覚った清朝は積極的にツェワンの懐柔に乗出したのであった。なお右の上論にみえる阿奴は、既述の如く康熙二十九年にツェワンがガルダンのカルカ侵略の留守にコブドに侵入して奪ったその妻の阿努にちがいなく、とすれば、その事件は、この上論の日付より判断して、必ずやその年の初めのことであったにちがいない。[30] これに対するツェワン及び阿奴の覆奏は、翌康熙三十年二月に至って清朝に届けられたが、その中においてツェワンらは、「大君凡有諭旨。俱願遵行」[31]と述べ、清朝への恭順の意志を示している。この後ガルダンの滅亡に至るまで、ツェワンは清朝との友好関係維持に積極的に努めているが、それはいうまでもなくガルダン打倒のための方策から出たものであった。

康熙三十四年（一六九五）二月、ガルダンはコブドを出て、またもやカルカ侵略に向い、同年秋、克魯倫河の上流、巴顔烏闌 Bayan ulan の地に兵を集結させ、この地でその年の冬を越す形勢をみせた（朔略・巻一七、康熙三十四年十一月戊辰、厄魯特降人阿穆呼郎供称）。

一方、この頃のツェワンについては（朔略・同条）、

策旺喇卜灘。現駐厄輪哈必爾哈之地。与噶爾丹仍前不睦。絶不通使。噶爾丹属下人衆。多有逃往策旺喇卜灘処者。

とあり、かれはボロタラの要隘エレーン・ハビルガに駐屯して、ガルダンの部衆を吸収しつつあった。かれがこの地に駐屯していたのは、実はガルダンのカルカ侵入の好機を利用して、その支配権の残っていたハミの攻略を意図したからである。

ガルダンが翌康熙三十五年（一六九六）五月、康熙帝の親征軍と昭木多 Jō modo に戦って敗れ、その没落を決定づけたころ、ハミは既にツェワンの手に陥ちていた。[32] 清帝はツェワンに諭して、

「もしガルダンが今汝の属下の厄魯特地方か、或いはハミ地方に逃亡したら、これを生捕って献ぜよ、もし殺した場合には、その首を献ぜよ」

と命じた（蒙略・巻二八、康熙三十五年八月甲午）。このためにガルダンは厄魯特の本地へも、またハミへも逃れることはできなくなった。従ってこの頃のかれがどこへ逃亡するかが清当局の関心事であった。これについて、既述の丹巴哈什哈らの供称には、かれらが清当局の尋問に応じて、ガルダンの逃亡先を予想した興味ある一節があり、それによればかれの退路は自ずと限られてくることがわかる。次にガルダンの逃避不可能の地を丹巴哈什哈らの言葉に従って掲げ、これを検討していってみよう。

若図爾古特之阿玉奇所。有讐人鶴齊爾図車陳汗之弟在。道既遙遠。而阿玉奇之女。又嫁策旺喇卜灘。是以阿玉奇所。亦不可往也。

まず図爾古特 Turγūd の阿玉奇 Ayuki の所にオチルトゥ・ツェツェン・カーンの弟がいるというのであるが、残念ながらこの点は確認できない。ただ阿玉奇[33]とオチルトゥとは姻戚関係にある。というのは、阿玉奇の姉のドルジ・ラブタン Dorji rabtan〈Rdo rje rab brtan（多爾済喇布坦）がオチルトゥの妻であったからであり、それ故にオチルトゥがガルダンに殺されたとき、彼女は逃れて弟に依った事実があり、またオチルトゥの娘が阿玉奇の長子のシャクドゥルジャブ Šaγdurjab〈Phyag rdor skyabs（沙克都爾扎布）の妻となっているからである。[34] ツェワンの娶った阿玉奇の娘については、ウンコフスキーの「コンタイシャ家リスト」に、

第二夫人、名セデルジャブ Седерчап（〈Sederjab）。彼女はアユキ・カーン Аюка хан の娘（ПУЕ, стр. 197）。

とみえるのがそれである。なお阿玉奇には前記のドルジ・ラブタンの上にもう一人姉がおり、彼女はカルカのメルゲン Mergen（墨爾根）汗エレーキー Eriyekei〉Ereki（額列克）の妻であり、このエレーキーの孫がガルダンと激しく争ったカルカの土謝図汗察琿多爾済 Čaγun dorji であった。[35] このようにトゥルグートのアユキ・カーンの姻戚が皆ガルダンの讐敵であったことは、表伝・巻一〇一伝八五、土爾扈特部総伝に、

蓋凡阿玉奇婚戚。皆噶勒丹讐。

とある如くであり、そこにはまたガルダンのオチルトゥ搗殺が、かれの運命に深い影を落していることに気づくであろう。

次にまた丹巴哈什哈らの言葉に、

噶爾丹与俄羅斯。差人貿易而已。原不相好。往俄羅斯之路。有洪郭墨及罕二道。罕之路。有明安特・忞稜古特諸人在。伊等俱係譬人。是以俄羅斯不可往也。

とあり、ガルダンはロシアへも逃れることはできないといっている。洪郭墨はレーナット地図第二にみえる Xoŭro-poŭ〈Qongroroi であろう。この地は同図によれば、ウプサ・ノールの北、ケムチク Kemčig（克穆池克）河の西に当る。[39] 罕はいま不明であるが、明安特 Mingrad、忞稜古特 Telenggūd〜Telūd の諸部族の住地よりして、やはりこの地方に求められるべきことは明かである。

それではガルダンの逃亡先はどこに可能性があるであろうか。それは丹巴哈什哈らによれば、チベットであった。

我等之意。以為噶爾丹更他往。必投達賴喇嘛去矣。

とある如くである。ガルダンがチベットへ逃亡するには必然的に青海を経過しなければならない。このために清朝は使者、二郎保 Ellangboo を遣し、青海の達什巴図爾 Daši（〈Bkra çis）bātur ら三十一台吉に諭し、「もしガルダンが汝らの地方に到ったら、これを捕えて清朝に献ぜよ」と命じたが、その際、この命に対して達什巴図爾が二郎保に語った言葉に（朔略・巻二八、康熙三十五年八月甲午、諭達賴喇嘛）、

噶爾丹殺我俄齊爾図汗。取我属裔。於我亦有仇。但噶爾丹之女。嫁博碩克図済農之子。乃啓聞西方而結姻者也。我等俱達賴喇嘛之徒。我等凡事皆啓聞西方。彼地之言如何。則遵而行之。不得拠我等之覆奏。

とあり、青海の王公達はガルダンに対しては、かれのオチルトゥ・カーン搗殺以来、仇敵の間柄ではあるが、かれらとしては一切はダライ・ラマの意向次第であるといっている。西方、即ちチベットがとりもったとするガルダンの娘と博碩克図済農 Bošoγtu jinung の子との婚姻については、朔略同条の諭第巴に、

青海博碩克図済農。潛与噶爾丹結姻。往来通使。而爾又不挙発。如噶爾丹博碩克図済農無爾之言。有相与為姻者乎。噶爾丹信爾唆誘之言。

とあり、これがダライ・ラマ下の実力者、第巴の使嗾によ

るものだという。

しかしながら既に進退きわまったガルダンは、康熙三十六年（一六九七）閏三月十三日阿爾台の阿察阿穆塔台 Ača amtatai で毒を仰いで自殺した。[37] 翌三十七年九月ツェワンは清朝に使者を遣して、ガルダンの屍を献じた。[38]

このようにしてツェワン・アラブタンとガルダンとの抗争は、多くガルダン自身の誤算により、ここに前者の勝利を以て幕となったが、今にして想うに、もしガルダンが清朝を敵とすることなく、そしてまた背いてボロタラに拠ったツェワン・アラブタンの処理に力を致していたら、或いはかれの意図するラマ教＝ズーンガル世界帝国の実現は可能であったかもしれない。

ツェワン・アラブタンはともかく一六九七年に、ガルダンの手からズーンガルの政権を取戻すことができた。かれは同年、もしくはその翌年にダライ・ラマによって新しいズーンガル汗に認められた。ウンコフスキーによれば、

ツェワン・アラブタンは叔父ボショクトゥ・カーンの死後、全人民の支配者になった。そしてダライ・ラマからかれに、他の名〔もしくは称号〕、エルデニ・ヅォリクトゥ・バートゥル・コンタイジ Эрдени Жуурюкту Батыр Контайша（〈Erdeni joriγtu bātur qong tayiji）が贈られた。〔これは三十五年程前のことであった〕（ПУК, стр. 186）。

とあり、ウンコフスキーのカルムック滞在中より三十五年程前といえば、一六九七―九八年頃に相当する。ウンコフスキー以外に、ツェワンの受封の時期についての史料はさし当って見当らないが、その封号については、欽定皇輿西域図志・巻之四十七、雑録一、故事に次のような興味ある一節がある。

策妄阿喇布坦時。曾受梵封為額爾德尼卓里克図洪台吉。訳言宝権大慶王。達賴喇嘛鑄鉄印以賜。準噶爾伝世宝也。伊犁平後。守臣獲此印。駅致典屬。有御製鉄章記。[39]

この額爾德尼卓里克図洪台吉〈Erdeni joriγtu qong tayiji が、ウンコフスキーの伝える、ツェワンがダライ・ラマから授けられた封号の正確な名称であろう。

ところでこの時のダライ・ラマは、第五代のガワンロブサンギャムツォ Ṅag dbaṅ blo bzaṅ rgya mtsho（阿旺羅卜藏嘉穆錯）が一六八二年（康熙二一）に歿して既になく、その執権職で、実力者であった第巴が一六九六年に擁立し

た第六代のツァンヤンギャムツォ Tshans dbyans rgya mtsho（倉洋嘉穆錯）であった。その空位の間は第巴が実際の政治をほしいままにしたのであった。従ってツェワンに称号を授けたダライ・ラマは当然第六代ということになり、この点ツェワンと第巴との関係よりすれば、いささか理解に苦しまざるをえない。或いは第巴はツェワンに封号を授けることによって、ズーンガル王に対するチベット支配者の優越性を確保し、加うるに、いささかでもツェワンの清朝側に傾くのを阻止しようとしたのか、或いはまた第巴はズーンガルの政権交替の現実を、それはそれとして認めざるをえなかったのかも知れない。

六

さて新ズーンガル汗ツェワン・アラブタンは即位後の数年間をズーンガル王国の再編成に費したようである。その間のかれは対外的な活動はほとんどしなかったようにみえる。康熙三十九年（一七〇〇）にツェワンが第巴征討と称して、青海に兵を送ったという情報が清朝にもたらされたが、清側では、これにとりあわず、[40]事実またツェワン側もそのような動きをみせなかったようである。翌康熙四十年（一七〇一）にツェワンは清朝に遣使入貢している。[41]

このようにして、ツェワンは対外活動をつつしみ、ズーンガル王国の内部の結束に努力を傾倒していたようである。而してこの後一七〇一年に始まったトゥルグート部、即ちヴォルガ・カルムックの内紛事件へのツェワンの介入は、かれの王権拡張に大きな寄与をなすものであった。蓋し清朝側でこの事件を次のように評価しているからである。準略前・巻一八、雍正七年二月癸巳の上諭に、

策妄阿喇布坦者。噶爾丹之姪也。与伊叔噶爾丹。不相和睦。帯領七人。潛逃至吐魯番地方居住。聖祖仁皇帝以策妄阿喇布坦。向与伊叔不睦。懼其誅害。遁跡逃生。加以恩沢。伊当感戴帰誠。且聖心仁慈。不忍遣兵。将噶爾丹余剰部落。悉行勦滅。恩加格外。遣使賞給策妄阿喇布坦。彼時策妄阿喇布坦。力弱勢微。甚為恭順。其後離間伊之妻父土爾扈特之阿玉奇汗。与其子三済扎卜。誘三済扎卜。攜帯万余戸。至伊住牧之処。因而強佔人已。従此遂不安分。肆意妄行。窺伺青海。擾害生靈。

とある如くである。即ち事件とは、ツェワンが岳父のトゥルグート（土爾扈特）のアユキ（阿玉奇）汗とその子のサン

ジジャブ Sanjijab〈Saṅs rgyas skyabs（三済扎卜）とを離間し、後者を誘って、万余戸を攜帯して、自分のもとへ来させ、而してこれを自分のものにしたというのであり、このトゥルグートの万余戸の獲得により、これよりツェワンは対外積極策に出るようになったとみているのである。ここにトゥルグートの万余戸（後述の如く、実は一万人）獲得が、ツェワンの王権伸張に作用するものがあったと考えられるのである。それと同時にこの事件を、一七七一年の清朝への大量逃亡によって終ったヴォルガ・カルムックのウルスの崩壊の最初の兆として把握すべきだとも考えるので、以下この事件の詳細を明かにしてみよう。

事件の概要については右の如くであるが、なおまた厄魯特二、康熙三十八年の条に次の如くある。

初。策妄阿喇布坦。徙博囉塔拉。乞婚阿玉奇。阿玉奇以女妻之。其第三子散札布。率屬戸万五千余從往。自噶爾丹既滅。策妄阿喇布坦。謀并諸衛拉特族。留散札布不遣。阿玉奇索其子。乃逐散札布帰額済勒。仍留從戸不之給。分隷準噶爾鄂拓克。阿玉奇固索不獲。因構難。

この記事は表伝・巻一〇一伝八五、土爾扈特部総伝に従ったことは明かであるが、次に掲げる準略前・巻二、康熙五十四年五月壬子の議政大臣等以訊問被擄厄魯特曼済供詞奏聞の条の記事と比較すると、かなりの不正確さを含んでいることに気がつかれよう。

議政大臣等奏言。臣等遵旨詳訊被擄厄魯特曼済。拠称我本土爾扈特人。我阿玉奇汗之子三済札卜。当年与父有隙。率一万人。投策妄阿喇布坦。策妄阿喇布坦。擄三済札卜。送還土爾扈特。留我等万人。分給所属宰桑等。……再我土爾扈特一万余人。皆愁苦度日。各有恋土之心。常欲乗間脱帰。或帰命天朝。

即ち両記事の大きな相異点は、前者がサンジジャブ〜サンジャブ（散札布）のズーンガリアへの移動を、ツェワンがアユキの娘を娶った際の行動とするのに対し、後者はこれにはふれず、ただ移動の原因をアユキとサンジジャブとの不和とみていることである。またサンジジャブと行を共にした部衆の数については、以上の諸史料では相互に異同があるが、ロシア史料においては、後述のウンコフスキーに一万五千帳、人員三万、もしくは三万強、バクーニンには一万五千帳とのみ伝えられている。いずれにせよ以上の中、準略前の晨済 Manji〈Sman rje の供称は、サンジジャブに

率いられて来た者の言であり、史料上もっとも信頼度の高いものと考えられるので、ここではこれに従って、その数を一万人とみておきたい。

さて上記の厄魯特二はサンジャブの事件を康熙三十八年（一六九九）の条に叙しているのであるが、そのことの誤りはもちろん、その記事は全体に不正確さを免れないでいる。そこでこれを検討するために、次にこの事件の一部始終をもっとも詳しく伝えているウンコフスキーの記録を引用しよう。

ウンコフスキーの日誌の一七二二年十月十九日の条に、かれがこの時到達したアルタン・エメール Алтын Имель〈Altan emel（阿勒坦額墨勒）[42]の地で聴取したこの事件の詳細についての次のような伝聞が記されている。

これより二十五年前、または一七〇〇年頃、アユキ・カーンの子のサンジャブ Санжип は父のアユキ・カーンから移牧して、路を草原にとり、カザーフ・オルダ（哈薩克）とバシュキール人の間を通って、イルティシュ河に向い、ヤムィシェフの塩湖 Ямышевская Соль[43]の近くに遊牧しつつやって来た。そしてそこからコンタイシャのウルスに向い、エメール Имель（〈Emēl 額米爾）河[44]に近づき、そこで冬を越した。サンジャブには約一万五千帳 юрта があり、部衆は全部で約三万、もしくはそれ以上と算えられた。コンタイシャはサンジャブが自分のウルスの近くにやって来たと知って、かれに使者を遣し、数名の主だった者と共に、客として自分のもとへ来るように求めた。というのは、サンジャブの実の妹がコンタイシャに嫁いでいたからである。だがサンジャブはコンタイシャのもとへ行かず、自分の方から使者を遣した。そしてこの使者は自由にダライ・ラマのもとへ行けるようにコンタイシャに求めることをサンジャブから命令されていた。

それよりコンタイシャの臣下はそのサンジャブの使者の外套の襟に、サンジャブからダライ・ラマに宛てた書簡が縫つけてあるのを発見した。それには次のような意味が含まれていた。

「ダライ・ラマはサンジャブにコンタイシャを殺す許可を与えた」

そのためにコンタイシャはこのサンジャブの使者を抑留し、サンジャブに知られないように監禁しておいた。他方コンタイシャはきわめて慇懃に、それだけ詐り深く、一再ならずサンジャブに使者を遣し、姻戚なるが故に、自分の客として来るよう求めた。しかしサンジャブはかれのもとへ行かなかった。最後に

コンタイシャは詭計を弄し、姻戚なるが故に会見するためとして、自らサンジャブのもとへ行くことにした。そして全軍を集め、自分の後について来て、アルタン・エメールという名の山に潜んで備えているよう命じた。そしてサンジャブとかれのもとにいる主だった者達を饗応するために、酒と羊とその他の家畜を持って行った。かくして二日後コンタイシャはサンジャブとあたかも娘婿と妻の兄弟の如く楽しく語り合った。サンジャブはコンタイシャの狡猾を知らなかったのである。

そのような詭計にかかって、サンジャブは全ての部衆もろ共コンタイシャに捕えられた。そして全ての部衆はコンタイシャの各ウルスに分配され、サンジャブは妻と共にその数わずか十人で、父のアユキ・カーンのもとへ帰された（ПЛУК, стр. 21-22, и 187-188）。

この伝聞はきわめて物語的であり、どこまで信用すべきか判断に苦しむ点もあるが、当時のカルムック側の伝承として尊重されなければならない。

さて前記厄魯特二によれば、サンジャブが部衆を率いてズーンガリアに移動したのは、かれがツェワンに嫁す妹のセデルジャブを送っていった際にかけてあり[45]、一方ウンコフスキーによれば、明かにサンジャブは妹をズーンガリアへ送っていったあと再びヴォルガ河へ帰っている。このいずれが正しいか、また何故にサンジジャブが父のアユキ・カーンのもとから去ったのか、これらの疑問を一挙に解決してくれるのが、ポツドニェフ氏の引用するバクーニン Бакунин, В の「カルムック記 Описание Калмыцких народов」にみえる次の記事である[46]。

一七〇一年、アユキの長子のチャクドゥルジャブ Чакдур чжаб（沙克都爾扎布）は自分の妻のタルバジ Тарбачжи のもとでアユキに出会った。そして嫁との不埒な交際のために、かれを刺し殺そうとしたが、時に間に合ったカルムックはチャクドゥルジャブにこの父殺しを許さなかった。復讐の念に駆られたチャクドゥルジャブはアユキの行為を全カルムックに言いふらし、かくしてカルムックにてアユキに対する極端な憎悪を起させた。カルムックの全領侯達が、チャクドゥルジャブと同母のアユキの子（サンジャブとグンデレク Гундэлэк）[47]と同様に部衆を集めて、チャクドゥルジャブに加って、かれと共にウラル河に去り、そこからズーンガルのコンタイジと互に使者を交し合っていたのは、その結果であった。まもなくアユキ自身に所属する部衆もかれらの例に倣った。その時アユキの第四子のグンジャブ Гунджаб（〈Günjab〈Kun skyabs 袞扎布）は

人々の大騒動をみて、ザイサンのネケイ Нэкей（〈Nekei）を秘かにチャクドゥルジャブの仮の幕舎に遣し、この騒動の張本人を殺し、かくして騒動を鎮めようとした。ネケイは夜チャクドゥルジャブの幕舎に到り、二発の弾丸を発射し、幕舎を貫いてかれを負傷させたが、殺すことはできなかった。

この後チャクドゥルジャブはかれに加ったカルムックによって次第に強力になり、グンジャブは兄の側からの復讐を恐れて、ヴォルガ河の山側へ去り、そして軍政官ニキーフォル・ベクレミシェフ Никифор Беклемишев の保護の下にサラトーフ Саратов の近くに留まった。アユキは残った百帳程をつれて、ウラルのカザーフの町へ去った。

カルムック草原の騒動の噂がモスクワに達すると、ここからサマラ Самара に大貴族ボリス・アレクセェヴィチ・ゴリツィン侯 боярин, князь Борис Алексеевич Голицын が派遣された。かれはチャクドゥルジャブに急使を送り、この際かれに父との和解を斡旋することを約束し、且ヴォルガへ帰るようにとの忠告を兼ねて、かれを招いた。チャクドゥルジャブはこの忠告をききいれ、事実また帰る決心をした。かれはサマラに到り、ここで父と和解した。かれの弟のサンジャブはサマラへは行かず、若干の他の血縁のつながる領侯達及びそれらの所属の部衆、その数一万五千帳と共に、サンジャブの実の妹のセデルジャブ Сэдэр-цикаб が嫁いでいたツェワン・アラブタンのもとへ移牧した。

ほとんど同様の意味のことをごく短くパルラスも述べている。[48] しかしやはりポツドニェフ氏によれば、国立アストラハン庁カルムック古文書館文書にカルムック語で書かれたドンドゥク・オンボ Дондук-омбо（〈Dondur ongbo〈Don grub dbaṅ po 敦多布旺布＝グンジャブの子）の書簡があり、それによれば、この騒乱はやや異って描かれているという。この書簡の意味する所をポ氏の引用する所に従って記せば、次の如くである（Изъ, стр. 255）。

チャクドゥルジャブ一人がアユキに対する騒乱の責任者ではなく、かれと共にサンジャブとグンデレクも暴動を起した。かれら三人が父に叛いて蜂起したのは、かれが弟のジャムツォ Цаомцо（〈Jamčo〈Rgya mtsho）と子のアラブタンの死後、グンジャブを偏愛し、このグンジャブにそれらの全ての部衆を与えてしまったからである。そのような一人に対する偏愛がチャクドゥルジャブ、サンジャブ及びグンデレクを怒らせたのであろう。かれらは父に対して反旗を翻えし、かれをタキ Таки ——この地はオレンブルグ県にあり（これがパラスとバクーニン

のいうアユキが逃亡したヤイク（＝ウラル＝筆者）のカザーフの町であることは明らかである）――に追放した。サンジャブはこの後ズーンガリアへ赴いた。この動乱の結果、その後、アユキとチャクドゥルジャブを和解させたボリス・ゴリツィン侯がモスクワからやって来た処はサマラではなく、サムル・ハラ Самур-хала（同じくオレンブルグ県にあり）であった。

この書簡によれば、サンジジャブがグンジャブに与えられた部衆を手に入れようとして失敗したがために、ズーンガリアへ放逐されたことは明かであろう。かれが故地を放逐されて以後の経過は、前記のウンコフスキーの伝聞その他に拠る外はない。

このようにしてヴォルガ・カルムックの騒乱は一七〇一年に始まったことは明かであるが、サンジジャブがズーンガリアに移動した時期、及びかれが再びズーンガリアからヴォルガ（額済勒）河へ放逐された年代については、清朝史料には何の拠るべきものがないが、ポッドニェフ氏によれば、前者は一七〇一年（康熙四〇）末か、一七〇二年（康熙四一）に、後者は一七〇四年（康熙四三）に比定されるという。[19] 従って厄魯特二及びその所依となった表伝の土爾扈特部総伝がこの事件を康熙三十八年（一六九九）の条にかけているのは、同年トゥルグートの使節が清朝に入貢しての帰途、ズーンガルに殺された事件があり、これに便宜上附して記したものにちがいない。

ツェワン・アラブタンはこうして獲得したトゥルグートの一万人を所属の支配階級たるザイサンらに分給することによって、その代償として、かれらからズーンガル王への忠誠を要求し、かくしてこれを求めることができたものと考えられる。ここに至ってツェワン・アラブタンのズーンガル王としての地位は名実共に備わったといえよう。この後かれが対外積極策に出で、まずカザーフに当り、次いでチベットに軍を進める経過については、稿を改めて説くことにしたい。

おわりに

以上、多岐にわたって考証したツェワン・アラブタンの事蹟を年譜の形にまとめ、結論に代えれば、おおよそ次の通りである。

一六六五年（康熙四）

ズーンガル王センゲを父としてツェワン・アラブタン出生。

一六七一年（康熙一〇）七歳

この年一月、センゲ殺さる。ラサより帰った叔父ガルダンのもとに引取らる。ガルダンに附してロシアに遣使。

一六七七年（康熙一六）十三歳

オチルトゥ・カーン討伐のためのガルダンの軍に参加。

一六七九年（康熙一八）十五歳

婚約者のアカイ（阿海）をガルダンに奪わる。

一六八八年（康熙二七）二十四歳

この年の末、弟のソノム・アラブタン（索諾木阿喇布坦）をガルダンに殺され、かつ自己の身にも危害の及ぶのを感じて、翌年春、センゲの旧臣七人をはじめ、部衆五千と共にコブドを脱出。

一六八九年（康熙二八）二十五歳

エレーン・ハビルガ（額林哈畢爾噶）に拠る。次いでガルダンをウラーン・ウス（烏蘭烏蘇）に破る。この後ボロタラへ移り、ここを根拠とす。

一六九〇年（康熙二九）二十六歳

ガルダンのカルカ侵入の間を利用してコブドに到り、ガルダンの妻子人民を掠して帰る。後、ガルダン支配下のトゥルファン、クチャ等東トルキスタンの都市の一部を奪う。

一六九一年（康熙三〇）二十七歳

前年末よりこの年の二月にかけてコブドを攻め、サクリ（撒克里）、ウラングム（烏蘭古木）の地を奪う。これによってイルティシュ上流域を確保。この年の二月、清朝にガルダンとの不和の事情を上奏す。

一六九六年（康熙三五）三十二歳

この年の五月、ガルダン、清軍と昭木多に戦って敗れる。この頃ツェワン・アラブタン、ハミを占領す。

一六九七年（康熙三六）三十三歳

この年の三月、ガルダン死す。この年もしくは翌年、ツェワン・アラブタン、ダライ・ラマよりエルデニ・ヴォリクトゥ・コンタイジの称号を受く。

一六九八年（康熙三七）三十四歳

ガルダンの屍を清朝に献ず。

一七〇一—〇二年（康熙四〇—四一）三十八歳

トゥルグート部のサンジジャブ（三済扎卜）、ズーンガリアへ移動。

一七〇四年（康熙四三）四十歳

サンジジャブの属衆一万人をザイサン（宰桑）らに分給。これによって王権の基礎は固まる。

① Ф. Портфели Миллера, No. 279, ч. 11, л. No. 50 a. Подлинник.〔略称 Ф. Портфели Миллера, No. 279〕(Материалы по истории Русско-Монгольских отношений, 1607-1636., Москва, 1959.〔略称 МИРМО〕стр. 303)., Pallas, p. S., Sammlungen historischer Nachrichten über die Mongolischen Völkerschaften, Th. 1, St-Petersburg, 1776, S. 42.

② 念のために満文華噶爾方略前編（Jun gar i ba necihiyeme toktobuha bodogon i bithei julergi banjibun）を参照したが（40—10 ч）、漢文の記事と異同はない。

③ Ф. Портфели Миллера, No. 279 (МИРМО, стр. 302)., Pallas, op. cit., S. 40.

④ Ф. Портфели Миллера, No. 279 (МИРМО, стр. 303). 第一夫人の名は、ミューラーによれば、「ツング・アラブタン Цунгу-Арабтан」ココノールのタイシャ、クイシャ Туйша の娘。一七二二年死」(Там же) とある。なおパルラスはミューラーに従いつつも、「ココノールのタイシャ、クイシャ」を「ココノールに住むデルベートのタイシャ、クイシャ Kuischa」(Pallas, op. cit., S. 43) と補っているが、これは、一七世紀の前半のシベリア史に著聞するトボル河流域に住牧したデルベートのクイシャ Куйша, Туйша, и т. д. (См. МИРМО, стр. 330, Именной указатель)・タイシャと誤認したためであろう。デルベートのクイシャがココノール（青海）に住んでいたとは考えられない。なおミューラーの記事は、ウンコフスキーに従ったことは疑いないが（IIУК, стр. 186 и 197）、ツング・アラブタンは正しくはウンコフスキーによれば、グュング・アラブタン Гюнгу Арабтан〔Гюнгу〈mo. Günjü 公主？〕(IIУК, стр. 197) であり、また彼女の死を一七二二年とするのは誤りで、正しくは一七二三年七月九日のことである（IIУК, стр. 3)。

⑤ 阿海はガルダンの妻となった阿努の妹である。表伝巻一〇一伝八五、土爾扈特部総伝（この土爾扈特部総伝は国朝耆献類徴初編巻首所収本には欠けているので、東京大学所蔵の武英殿刊本、欽定蒙古回部王公表伝に拠った）に、次の如くみえる。

噶勒丹。……始以鄂齊爾図孫女阿努為妻。……阿努有女弟。曰阿海。噶勒丹兄子策妄阿喇布坦。将以為妻。噶勒丹奪取之。

⑥ 以上の点から、表文の説を再検討してみると、次のようにも考えられる。つまり、表文に己巳の年に四十七歳とあるのは、数詞の第二桁を誤ったものとみて、これを二十七歳と考え直してみることである。そうすると、ツェワンの生年は一六六三年（康熙二）ということになる。従ってかれは父を失った時九歳、婚約者を叔父に奪われた時十七歳ということになる。また後述する如く、かれが弟のソノム・アラブタンを叔父ガルダンに殺された事件（一六八八、康熙二七）の翌年、己巳の年に叔父から離反独立したのは、四十七歳という遅い時期のことではなく、二十七歳の血気さかんな、独立心に溢れる青年期の行動であったことになる。なおシャスティナ шастина 氏がツェワン・アラブタンの生年を掲げて、これを一六六三/五年としているのは（Шара

Тулжи. Монгольская летопись XVII в., пер. Н. П. Шастиной, М.-Л., 1957, стр. 193, прим. 109)、根拠は示されていないが、ロシア・カルムック史料に拠ったものにはちがいなく、私案と結論的に一致するもののあることを示している。しかし私案はあくまで私案であるので、ここではミューラーらの説にひとまず従っておきたい。

⑦ ИЛЖХ, стр. 241. この時使者の持参したガルダンの書簡の内容は次の如くであったという、「かれらの一族は以前から先の大帝にしてロシアの大侯に仕えて、使節をたえず派遣していた。かれ、タイシャは祖先に従い、大帝に使者ザイサン зайсан（〈jayisang 宰桑）を遣したのは、大帝がかれに賞賜し、且シベリアの貴族たる軍政官たちに、かれの民に何の税もかけないように—それについては他の諸国にては聞いていない—命じられたい」(Там же, стр. 244)。

またツェワン・アラブタンの書簡の内容については、

その書簡は、ガルダンの書簡の内容を全く繰返したものである。その中の新しい点は、かれの父センゲにヤサクを納めていたが、後に背いてトムスクに逃げた白カルムック（＝テレウート族—筆者）の六〇戸についての言及だけである(Там же, стр. 246)。

これらよりすれば、カルムック酋長がガルダンとツェワン・アラブタンであることは疑いないようである。なおカーヒン Cahen, G. は、〔七〕一八二年（一六七三—七四）にロシアに遣使したカルムック族の酋長としてその名のみえる Galdan と Araptor, のガルダンを別人であろうと疑っている(Histoire des relations de la Russie avec la Chine, Paris, 1912, p. 137, note 4)。このカーヒンの記事はアブリンの際のものであることは疑いない。というのは、アブリンと共に来たカルムック使者はトボリスクに三年抑留された後、モスクワに来て使節庁に書簡を提出したのが一六七三年八月一日のことだったからである(ИЛЖХ, стр. 244)。

⑧ 註⑦の一六七一年の書簡において、ガルダンはタイシャ тайша〈mo. tayiji（台吉）と称して、未だカーン、もしくはコンタイシャと称していない。ガルダンがコンタイシャと称したもっとも古い時期のものは、一六七二年秋のクラスノヤルスク軍政官フルシチョフ Хрущов の報告に収められた、カルムックのタイシャ、ダンジン Данжин〈Bstan ḥdsin の使者からの聞書中にみえる《コンタイシャ・ケゲン контайша Кегень（Кегень〈mo. Gegen)》である(ИЛЖХ, стр. 242)。羽田明教授がガルダンのコンタイジと称したのを、一六七二年頃と推定しておられるのは（ガルダン伝）、きわめて妥当とおもわれる。

⑨ L'asie centrale aux XVIIe et XVIIIe siècles, Lyon, 1912, p. 64.

⑩ 欽定西域同文志・巻五、天山北路水名、烏魯木齊雅爾伊犂諸路屬。

⑪ Baddeley, J. F., Russia, Mongolia, China, Vol. 1, London, 1919, p. ccii. 地名のロシア字転写は Bordzinkévich, A. 氏がカルムック原版から転写したものによる。

⑫ 欽定西域同文志・巻四、天山南北路山名、天山正幹準噶爾部回部南北交界諸山に、

額林哈畢爾噶鄂拉。準語。額林。謂問色。哈畢爾噶。謂旁肋。山為博克達支峯。如人之有左右肋也。mo. Eriyen qabiγ-a aγula。ka. Erén qabirγa ūla。

とあるのがそれである。従って、布克他厄冷哈必爾罕の布克他は Boγdo ūla（博克達鄂拉）（同文志同条）を指すものと考えられる。

⑬ Baddeley, op. cit., p. cxxiii. なお Baddeley はこれを Mts. Kara-adzirga と比定している(Ibid)。この地が、表伝・巻七七伝六一、厄魯特扎薩克多羅郡王阿喇布坦列伝に、扎布堪河と並んでみえる哈喇阿済爾罕であることは疑いない。

⑭ ミューラー及びパルラスが、ソノム・アラブダンと共にダンジン・オムブも殺されたとするのは誤りとしなければならない（Ф. Поргѣеи Миллера, No. 279 [МПРМО, стр. 303]., Pallas, op. cit., S. 42)。

⑮ この記事は、丹済拉がこの年ガルダンの表に附して清朝に入貢したことに関連して述べられており、なおまた後の康熙二十七年のガルダンのカルカ侵入とも関連させて述べられてもいるので、便宜上康熙二十三年の条にまとめて述べたものともみられなくはないが、康熙二十三年をダンジンの年齢でいえば、父に死別した康熙十年から算えて、最低十四歳、兄ツェワンの生年、康熙四年から算えて最高二十歳に達しない間に当ることになり、かれがガルダンのブレーンであったというには若干若すぎる感がないわけでもないが、怪しむには足りないであろう。

⑯ 詳しくは表伝・巻七八伝、六二厄魯特扎薩克輔国公丹済拉列伝を参照。

⑰ 準略前・巻七、康熙五十九年八月甲辰、靖逆将軍富寧安疏
烏蘭烏蘇。与阿克塔斯。相距七十里。

⑱ 朔略・巻五、康熙二十八年十二月辛末の条。阿爾尼が八月にガルダンのもとに到ったことは、朔略・巻五、康熙二十八年十月乙酉の条に拠る。

⑲ 表伝・巻七八伝六二、厄魯特扎薩克輔国公丹済拉列伝
先是。噶勒丹兄子策妄阿喇布坦。与噶勒丹修怨。徙博囉塔拉。

⑳ 準略前・巻六、康熙五十八年二月壬戌、靖逆将軍富寧安疏
烏蘭烏蘇。四面皆山。地隘。不可以多駐兵。

㉑ Из10.К, стр. 251. ポツドニェフの説の根拠は、かれが拠ったという、康熙四十一年（一七〇二）に康熙帝によってツェワン・アラブタンのもとへ派遣された漢人使者ボージュ Boojuny の満洲語で刊行された日記なるものにみえる、ボージュがツェワン・アラブタンから聴いた次の語句、「わたしは馬の年に叔父ガルダンから逃れた後……」にみえる馬の年を一六七八年（戊午、康熙一七）に比定することにある。比定の理由は、ガルダンがチベットから帰還した一六七一年以後、最も近い馬の年は一六七八年と一六九〇年とがあるが、後者は既にツェワンが有力なズーンガル侯となっているので、従ってかれがガルダンから逃れたのは必然的に前者、即ち一六七八年しかないというにある。またこの比定に基いて、ウンコフスキーのいう、ツェワンがガルダンから逃れてボロタラ河へ去ったとするのを否定し、新たにこれをトゥルファンと考究している。つまりポツドニェフはザヤ・パンディタ伝を引いて、ガルダンがボロタラ河に一六八〇年と八一年の冬を、なおまた一六八六年の冬をここで過していることを認めるなら、いかにして一六七八年にガルダンから逃れたツェワン・アラブタンがボロタラ河に逃れることができたであろうか、といっている。そしてまたボージュの日記にみえるツェワン・アラブタンの言葉、「わたしの叔父ガルダンがわたしの弟ソノム・アラブタンを殺し、わたしを害そうとしたとき、わたしは自分に向けられた襲撃を察して、七人と共にトゥルファンに逃れた……」に拠り、ツェワンの逃避先をトゥルファンと決定したのであった（Там же, стр. 251-252)。いずれにしても、右の馬の年を一六七八年に比定することは誤りであり、ここでは明かに一六九〇年を採るべきである。つまり、ツェワン・アラブタンのいう馬の年は、後述する如く、かれがトゥルファンを占領した事件に対応させるべきものなのである。ボージュの伝える原文を見ない限り断定はできないが、これまでのわたしの行った考証からしても、ポツドニェフに誤読、誤解があることは明らかである。

ところでポツドニェフは、このボージュの日記なるものを利用するに当って、その日記の書名はおろか、引用箇所などの一切を記していない。かれのいう漢人ボージュは、明かに満人保住 Boojiu の誤りにち

がいないが、保住が康熙四十一年にツェワン・アラブタンに使いした記録は清朝側の史料にはみあたらない（かれがツェワンのもとへ派遣された事実を確認できるのは、康熙五十四年だけである―準略前・巻二、康熙五十四年五月乙卯の条―）。保住の日記とはいかなるものか、博雅の士の示教を得たい。

㉒ Очерки истории Семиречья (Академик В. В. Бартольд, сочинения, т. 2, ч. 1, Москва, 1963, стр. 98)

㉓ Пдж.Х, стр. 241 и 300.

㉔ 近代支那史、大正二五、京都。p. 72. その根拠は示されていない。

㉕ Op. cit., p. 64. クーランの根拠は東華録にあるらしいが、ただしバルハッシ湖とするのは、必ずやパルラスに拠ったものにちがいない（Pallas, op. cit., S. 42）。

㉖ 上記保住の記事にいう、馬の年、トゥルファン云々が、このザヤ伝の馬の年のトゥルファン占領と一致すべきものであることは明らかであろう。

㉗ Renat Map 2., Baddeley, op. cit., p. CCXV.

㉘ Атлас СССР, Москва, 1955, 63-64.

㉙ Renat Map 2., Baddeley, op. cit., p. CCXV.

㉚ なお阿奴は後に再びガルダンに投じ、康熙三十五年に清軍に殺された（朔略・巻二五、康熙三十五年五月癸酉）。

㉛ 朔略・巻九、康熙三十年二月戊午。

㉜ 朔略・巻二七、康熙三十五年七月壬申
哈密之地。已為策旺喇卜灘所取。

㉝ 清朝史料にオチルトゥの弟としてみえるのは阿巴頼 Abalai だけであり（欽定西域同文志・巻十、天山北路準噶爾部人名四、和碩特衛拉特扈。表伝・巻八一伝六五、青海厄魯特部総伝）、しかもかれは既に一六七一年に死んだという（CBT, p. 44）。

㉞ 表伝・巻一〇一伝八五、土爾扈特部総伝。

㉟ 同右。

㊱ Renat Map 2., Baddeley, op. cit., p. CCXV.

㊲ 朔略・巻四二、康熙三十六年閏三月甲子。

㊳ 朔略・巻四八、康熙三十七年九月癸未。

㊴ 御製鉄章記は西域図志・巻之四十一、服物一に次の如くみえる。
鉄章一。錯以金。方得寸有十分寸之五。博得十分寸之二。柄以木。方如之。博得十分寸之五。稍豊其上刻若井渫。又鐫以窮刻若華。表柱之首。其長二寸。通章之博。高二寸有十分寸之七。藻上穿好綬。約之綬之。窮為蓍錦囊覆。垂章上不可離。歳以髹盞。其文曰。厄爾德尼卓里克図洪台吉之章。華語所謂宝槌大慶王也。蓋自策妄阿拉布坦時。乞自達賴喇嘛用梵書刻印錫予。以為準噶爾伝世之器。今年夏。既平準夷。遂獲此章。駅致典屬。予既訝鑛鍋。君長亦有世守法物也。而又惘達瓦斉不得辭毀損之愆。若夫戒盈知懼。固不在区区抑埴之物矣。作鉄章記。

㊵ 準略前・巻一、康熙三十九年七月乙未。その理由は、同条の上諭に、策妄阿喇布坦。人雖狡猾。但博羅塔拉至土伯特。必経喀喇烏蘇等艱險之処。路徑甚悪。断不能往伐。何也。策妄阿喇布坦。素行奸悪。故附近哈薩克・布魯特諸部。皆相仇讐。欲悉軍大挙。則路既難行。且無留護其喪孥者。
とあり、ツェワンのいるボロタラよりチベットへの路は、途中喀喇烏蘇 Qara usu 等の難所がある外に、またボロタラ附近のカザーフ（哈薩克）、キルギズ（布魯特）の諸部とツェワンとは仇讐の関係にあり、従ってかれはボロタラを留守にして大軍を繰り出すことはできないというにある。

㊶ 準略前・巻一、康熙四十年十一月癸卯。

㊷ 欽定西域同文志・巻四、天山南北路山名、天山北路準噶爾部所屬諸

山。

㊸ この湖はイルティシュ河の東岸、いまのセミパラチンスクの近傍にある。参照、拙稿「カラクラの生涯」（東洋史研究二二―四）p. 9.

㊹ 準略前・巻二、康熙五十四年六月丙戌の散秩大臣祁里德等以会議進勦策妄阿喇布坦事覆奏の条に、

　拠喀爾喀汗王台吉等言。我兵従此進勦策妄阿喇布坦。有両路。一由布拉罕。順額米爾河。尋伊犂河。過阿勒坦厄默勒嶺。一由博克達額林哈畢爾噶。進闖勒奇嶺。此両路。俱至額米爾河。於博羅塔拉地方会合。

とある額米爾河がそれであろう。阿勒坦厄默勒嶺が前記の Altan emēl [ūla] である。

㊺ この婚姻が既述の康熙三十五年の丹巴哈什哈らの供称にみえるものであることは明かである（参照六六頁）。従って厄魯特二による限り、サンジジャブのズーンガリア移動はこの時以前ということになる。

　嫁のセデルジャブがサンジジャブの妹に当ることは、ウンコフスキーの伝える如くであり、また朔略・巻四八、康熙三十七年四月癸亥の策旺喇卜灘陳奏哈薩克搆兵情由にも次の如くみえる。

　臣妻父阿毓奇（Ayuki）。以其女帰臣。使妻兄三扎布送臣之妻。

㊻ Описание Калмыцких народов, сочиненное Стат. Сов. Василием Бакуниным в 1761 году. Рукопись Императ. Публ. Библ. Древнехранилище Погодина No. 1816 (ИЗвоК, стр. 254-255).

㊼ 表伝・巻一〇一伝八五、土爾扈特部総伝によれば、阿玉奇に八子あったというが、その名の伝えられているのは、長子の沙克都爾扎布の他に、第三子の散扎布と韋行不明の袞扎布（バクーニンによれば第四子）だけである。

㊽ Pallas, op. cit., S. 68-69.

㊾ ИЗвоК, стр. 256-257. その根拠は、ボージャ（保住）の日記に、ボージャは一七〇三年一月にトゥルグートの服従について既に終った事実としてツェワン・アラブタンと話をしている、とあるに拠る。もしその通りだとすれば、サンジジャブのズーンガリア移動は、ポ氏のいう如く一七〇一年末―一七〇二年の間にあるはずであり、従ってまた氏の比定する如く、チャクドゥルジャブとアユキの和解は一七〇二年にあったにちがいない。また氏は全ウルスが再びアユキの権力下に入ったこの和解の後、アユキがサンジジャブとその部衆の返還を求めて、使者をズーンガリアに送ったのは一七〇三年より早くないとみている。そこで氏はまたパルラスがサンジジャブとその部衆のツェワン・アラブタンへの服従を一七〇四年二月十一日としている（Pallas, op. cit., S. 69）のを疑い、パルラスの根拠は、カルムック年代記ガワン・シャラブ Табан-шараб ⟨Tabang šes rab ⟨Ñag dbaṅ ces rab に、「ヅォリクトゥ・コンタイジは木―猿の年（甲申、一七〇四）の正月（čaγan sara）十一日に、サンジャブとその属下の一万五千帳を奪った」とあることにあると指摘し（なおこの記事は、Пучковский, Л. С., Монгольские, Бурят-Монгольские и Ойратские рукописи и литографы Института Востоковедения, т. 1, History, Law., M-Л., 1957, стр. 139. にみえる同年代記では、л. 46 にあるとみえている）、パルラスは文中の čaγan sara を陽暦の二月に改め、しかもかれはこの記事を以て、ツェワン・アラブタンのサンジジャブ拘禁の年代と誤認したものであり、事実はツェワン・アラブタンによるサンジジャブのズーンガリアからヴォルガへの放逐と、その属下の一万五千帳の最終的な獲得を示したものだとしている。このようにポ氏の比定の根拠は保住の日記にあり、この点いささか不安の念なきにしもあらずだが、全体として大過はないものと思われるので、今は氏に従っておきたい。

（京都大学研修員）

from the side of state power, which occured a certain conciousness among people as a necessary consequence. This is very important in researching further problems of the status system.

Entering of *Ts'ê-wang A-la-pu-t'an* 策旺阿喇布坦

by

Hiroshi Wakamatsu

There were many unknown problems about the administration of *Ts'ê-wang A-la-pu-t'an* 策旺阿喇布坦 who opened the golden age of the *Dzungar* 準噶爾 kingdom, so-called the last nomadic kingdom in the northern Asia and struggled for hegemony against *Ching* 清 dynasty in vain. In this article, explaining the process that he became a great enemy of Borotara in Ili country against previous king *Galdan*, we also present the fact that *Ts'ê-wang A-la-pu-t'an* 策旺阿喇布坦, acceded to the throne for *Galdan*, intervened in the Volga-Kalmuk riot since 1701, and succeeded in the establishment of monarchy by sharing its defrauded ten-thousand people among his ruling class *zaisang* 宰桑 in 1704.

The Formation of Alexander's Empire and the Greek World: An Essay on the Political Background of the "Exile Decree"

by

Akira Ohmuta

In the last phase of establishing his empire, Alexander, intending to achieve the unification of his rule over the Greek cities, issued two important edicts in 324 B. C., ordering them to receive back many exiles (amounting over 20,000) and requesting for his deification. He is said to have aimed by the former to remove the danger to security involved in the homeless men, whose exodus had been caused by the bitter faction-fights and their economic declive. In this article an attempt has been made first of all, to illustrate some of the characters